

ミステリ読書案内

2022. 6. 19 発行元

第367号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

津村秀介の代表作

1982年に作家としてスタートした津村秀介は、深谷忠記と同じように「本格もの」作家として期待された時期があった。しかし、大きな話題を集めるほどの傑作にはたどり着けなかった。代表作を考えてみよう。

トラベルミステリの流れの中で

ノベルスの時代であり、トラベルミステリの時代でもあった。「本格もの」としてアピールするよりも先にどうしても「ノベルス」や「トラベル」の方向性が出てきてしまう世の流れだったように思う。津村秀介はその枠から出ることはできなかつたと言えるだろう。

全国各地、ずいぶん回ったような気がする。新幹線もたくさん利用する場面が登場した。『時刻表』好きの私には興味を魅かれる部分が多かった。当時のテレビドラマの原作にも使われたようである。でも、そ

れ以上のブームに結びつくことはなかった。名探偵・浦上伸介にしても地味で目立ちにくい。

現在のライト系ミステリやキャラクター小説の特色と比べてみるとよいのではないか。ミステリ・マニア以外に読者層を広げるには引き付ける要素が少ないのだろう。

古書市場を調べてみると、津村の文庫本はまだ安価で流通しているようである。ブックオフなどではほとんど見なくなったが、今が手に入る最後のチャンスのようにも思える。あと10年もたてば手に入りにくくなるだろうと予想される。興味のある人は是非今のうちに。

NO.3「黒い流域」

1983年栄光出版社。『時間の風蝕』に続く長編第三作になる。私の手元にあるのは2000年のケイブンシャ文庫版。『相模川・酒匂川殺人事件』という副題がついている。

日をおいて発見された二人の女性の死体。一人は相模川の上流で。もう一人は酒匂川の中流で。検死の結果、二人はほぼ同時刻に殺害されたことがわかった。二人は大東洋建設の常務取締役の太田義行の妻と愛人であった。県警本部から派遣された内山警部補は所轄署の坂野刑事と組んで捜査に当たる。状況証拠はすべて一人の容疑者に集中する。しかし、そこには鉄壁のアリバイが。そして、同時刻に離れた場所に出現することはそもそも無理がある…。どんな仕掛けが…。

NO.1「時間の風蝕」

1983年栄光出版社。初期の作品はエイコーノベルス版が多かった。私の手元にあるのは1994年の青樹社文庫版。彼の長編第二作になる。第一作は『影の複合』。書下ろしの形がほとんどの津村ミステリにあって、その原点・基本形になる作品と言ってもよいだろう。

舞台は横浜で始まる。新横浜駅近くのホテル・モリヤスに黒づくめの女が入ってくることからスタート。男が待つ306号室に案内された女は30分後にはもう帰ってしまう。タクシーを呼んで新横浜駅へ向かったようだ。その一時間後に男の服毒死体が発見された。女が出ていく直前の死亡時刻が推測された。現場からは金の延べ板のようなものが見つかった。捜査に当たるのは横浜港北署の佐伯警部補と井上刑事。調べていく中で、ホテルを予約した人物と被害者は別人だったことが判明したり、女が新横浜からこだま269号に乗ったらしい事実が浮かび上がってくる。女の行方を追う中で、三島駅近くの工事現場で同じく服毒死体になっていることがわかった。最初は男女間のもつれの問題のように見えていながら、北陸の貴金属をめぐる争いに発展していき、容疑者が絞られていくことになる。『時間の風蝕』の題名のとおり鉄道と飛行機を含めたアリバイの壁に突き当たることになり、最後の山場へと向かっていく。短いながらもしっかりした構成。

No.2「宍道湖殺人事件」

1986年の出版。津村にとってカップノベルス初登場の作品。長編第九作に当たる。(デビュー作を『影の複合』ではなく、『偽りの時間』にすると第十作になる) 『山陰殺人事件』がからスタートした名探偵・浦上伸介シリーズの一冊になる。浦上伸介は『週間広場』特派のルポライターで、いつも捜査のペアを組むのは神奈川県警記者クラブに属している『毎朝日報』の谷田実憲。本作品ではプラスして被害者の妹・落合玲子が浦上の補助として活躍する形を取っている。

事件の発端は宍道湖畔の松江のホテルでの男性の墜落死。直前に争う声が聞こえ、ホテルの部屋には酒を飲まない被害者なのにスペイン産のワインが残されていた。被害者・落合和彦は、少し前の海外旅行中にスイスのレマン湖のホテルで恋人の塚田千秋を墜落死で亡くしていたという背景を持っていた。浦上はこの時横浜で起きた別の殺人事件に取り組んでいたのだが、玲子の依頼に応える形で捜査を開始する。実はこれらの事件は後の方で関連が…。容疑者のアリバイの問題、横浜と宍道湖の関係は？など謎は複雑に絡み合っている。